

2014年3月20日／浪 宏友ビジネス縁起観塾

## 救われの原理

資料：庭野日敬著『法華三部経 各品のあらましと要点』（佼成出版社）「観世音菩薩普門品」

### 1. 観世音菩薩普門品の概要

- (1) 無尽意菩薩（むじんにぼさつ）が釈迦牟尼世尊に、観世音菩薩は、なぜ観世音という名前なのかと質問します。
- (2) 釈迦牟尼世尊は、観世音菩薩の広大な徳についてお話しします。
- (3) 無尽意菩薩が、観世音菩薩はどのようにして人々を救うのですかと質問します。
- (4) 釈迦牟尼世尊は、観世音菩薩は相手に応じて適切な姿を現して導くことをお話しします。
- (5) 無尽意菩薩が、観世音菩薩に宝珠の首飾りを布施しますと、観世音菩薩はこれを二つに分けて、釈迦牟尼世尊と多宝如来に捧げます。
- (6) 無尽意菩薩が、再び観世音菩薩の名について偈で問いかけ、釈迦牟尼世尊が偈で答えます。

### 2. 〈真実の智慧〉の象徴

この品でたいせつなことは、ともすれば観世音菩薩は〈他力の救い〉を頼む対象のように考えられてきましたが、そうではなく、じつは〈真実の智慧〉の象徴であるということです。（庭野日敬著『法華三部経 各品のあらましと要点』p.209）

他力の救いとは、ここでは、神仏などを拝んだりお願いしたりして救っていただくということです。自分の力の及ばないことを、見えない力によって救ってもらおうとする信仰は、人間の自然な情であるともいえます。自分本位の欲望を満たしたい、我儘を通したいと神仏を拝み、お願いすることもあるようです。

いずれにしても、こうした信仰には真の意味での救いはありません。

それでも、拝んだ、お願いしたということによって、心が安まったり、励ましになったりすることもありますから、その意味での救いはあると言えるかもしれません。

### 3. 中諦の真智

真実の智慧といっても、厳密に言えば〈すべての現象を、空にもとらわれず、仮にもとらわれず、双方の融合相即したものとしてとらえる智慧〉すなわち〈中諦の真智〉です。（同p.209）

「空・仮・中」は、仏教の根幹をなす重要な理論ですが今回は触れないでおきます。日を改めて、学んでみたいと思います。

#### 4. 人間の平等相と差別相

これ(中諦の真智)を人間に即していえば、人間の平等相をも生かし、差別相をも生かし、どんな人の、どんな場合にもピッタリとあてはまる、〈自由自在の智慧〉です。諸法実相を説く法華経(妙法)そのものです。(同p. 209~210)

#### 5. 智慧

「智」というのは、すべてのもののちがっている点(差別相)を見分ける力です。太郎と次郎はどこがちがうか、その「違い」を知る力です。

「慧」というのは、反対に、すべてのものに共通の真理(平等相)を見出す力です。太郎と次郎はちがった性質を持っているようだが、その奥をみるとやはり同じ人間で、仏性を備えている、平等にほとけになれる、そういうふう「平等」を知る力です。

この二つの力が完全に備わってこそ(中諦の真智)、世の中のすべてのことがらを正しく見きわめることができるというのが、仏の教えなのです。(庭野日敬著『法華経の新しい解釈』p. 41~42)

#### 6. 大悲代受苦

観世音菩薩は、そのような真実の智慧の持ち主であるとともに、〈大悲代受苦(おおくの人に代わってその苦しみを受けてあげようという大慈悲心)〉の持ち主でもあるのです。(庭野日敬著『法華三部経 各品のあらましと要点』p. 210)

「代受苦」の真意は、相手の身になり相手と自他一体になって救いの手を差し伸べることです。

#### 7. 妙法に救われる

われわれがほんとうに救われるには、妙法を知り、妙法をおもい、妙法にしたがって行動するよりほかはありません。(同p. 210)

「妙法」とは「奥深い真理」という意味です。真理を知り、真理をおもい、真理にしたがって行動すれば、救われるのです。そのようにできることが既に救われている姿です。

#### 8. 「救い」について

「本仏」はいつも天地の万物を救おう、救おうという精神をもって宇宙に遍満しておられるのです。「救う」といっても、網で魚をすくうように「救う」のではなく、人間なら人間、動物なら動物、植物なら植物、そのものの持っている本来の生命を生き生きと発現させ、すくすくと伸ばしてやろうという「救い」なのです。(庭野日敬著『法華経の新しい解釈』p. 35)

## 9. 他を救う

また、われわれがほんとうに他を救うには、慈悲心にもとづく自己犠牲的な行動によって、その人を妙法の道へみちびくよりほかに方法はないのです。

この品に、観世音菩薩を念ずることによって七難からのがれることがくわしく説かれていますが、それらはすべて、このことを教えられているのです。(庭野日敬著『法華三部経 各品のあらましと要点』p.210)

欲望や我儘に基づく願いを叶えてあげることが救うことではないのです。

## 10. 観音信仰

そうはいっても、むかしの人はそんな抽象的なことをピタッと確実につかまえることができませんでしたので、観世音菩薩というすぐれた洞察力(世間の音を観る=世のすべての動きを知り、すべての人のほっするところを見とおす)をもち、三十三身というさまざまな姿となっていたるところにあらわれ、大慈悲心をもってあらゆる苦しみを救ってくださる、美しくやさしいお方を設定して、そのお方に心をかよわせれば、心が妙法に感応して救われる……と説かれたわけです。(同p.210~211)

観音様に手を合わせるときは「私の心が観音さまの心になりますように、私の言葉が観音さまの言葉になりますように、私の行ないが観音さまの行ないになりますように」と拝むのが、正しい拝みかたであると言えます。

## 11. 普門示現

### (1) 観世音菩薩になりたい

ですから、現代のわれわれは、観世音菩薩というすばらしい大人格を心に思い浮かべ、「あのようになりたい」というあこがれと願いをもたねばならないのです。そのあこがれが強烈であれば、どんな苦しみがやってきてもかならずそれを乗り越えることができます。またそういう願いをもっておれば、ひとの苦しみを見れば、救いの手をさしのべずにはいられなくなります。

この〈観世音菩薩になりたい〉という願いこそが、〈普門示現〉ということの神髄にほかなりません。〈普門示現〉がこの品の最大の要点です。(同p.211~212)

「観世音菩薩になりたい」と強く願い、観世音菩薩を手本として、修業をするのです。

自分の行ないを観世音菩薩の行ないにする修業、自分の言葉を観世音菩薩の言葉にする修業、自分の心を観世音菩薩の心にする修業をするのです。

これが正しい観音信仰であると思います。

## (2) 普門とは

〈普門示現〉の〈普〉とは、ひろくあまねく、どこにもかしこにも、という意味です。

〈門〉というのはもちろん出入り口のことですが、それから転じて〈家〉という意味にもちいられます。また〈部門〉などというように、ものごとを分類するときのひとつの区分けにもちいられます。ですから、〈普門〉というのには、〈あまねくすべての家に〉という意味もあるし、また〈人生問題のあらゆる部門に〉という意味もあるわけです。

ひっくりかえれば、〈この世のいたるところに、ありとあらゆる問題と、あらゆる場面に、自由自在に〉ということになります。(同p. 212)

## (3) 示現とは

〈普門示現〉の〈示現〉は、すがたを見せることです。ここでは〈仏・菩薩が衆生を救うために種々のすがたを示して現われること(仏教語大辞典)〉です。

## (4) 普門示現とは

つまり〈普門示現〉とは、観世音菩薩がこの世のいたるところに、あらゆる問題と、あらゆる場面にそれぞれふさわしい姿をとって自在に現われ、人びとを救い導いてくださるということの意味しているわけです。(庭野日敬著『法華三部経 各品のあらましと要点』p. 212)

「ふさわしい姿」の一人が、自分自身であることを忘れてはならないと思います。自分もまた、縁ある人びとを救い導く役目を持った観世音菩薩の一人なのです。

## (5) 救いの手をさしのべる

このような観世音菩薩になりたいと願うことは、家庭において、社会において、国家において、更に広くは世界においてそれぞれ置かれた立場にふさわしく、人びとの苦しみ・悩みに応じた具体的な救いの手をさしのべていこうと願うことです。(同p. 212~213)

特別なことをするのではなく、それぞれの立場ですべきことを、観世音菩薩の心で、人びとのためを思いながらするのです。

## (6) 大慈悲心

そういう行動こそが観世音菩薩の〈大悲代受苦〉の大慈悲心そのものであるからです(同p. 213)

慈悲心の大きな人は、人びとの苦しみ・悩みを見過ごしにできないのです。自他一体の心境で、どうしても手をさし伸べてしまうのです。

このとき、中諦の真智の裏付けがあることが必要です。

## (7) 代受苦の実践

こうした〈代受苦〉の行動を、どのような立場においてでも、どのようなささいなことでもいから、一人でも多くのひとが実践にうつしたならば、家庭・社会はもちろんのこと、世界の平和も決して夢ではなくなるのです。

そういうことですから、この〈普門示現〉ということがこの品の最大の要点になるわけであり  
ます。(同p. 213)

## 1 2. 徳も力も妙法とその実践から生ずる

さてこの品でもうひとつ見のがしてならないことは、観世音菩薩の広大な徳と力に感激した無尽意菩薩が、自分の首飾りをささげたところ、観世音菩薩は、すぐさま半分を釈迦牟尼世尊に、半分を多宝仏塔にささげたということです。

それは、観世音菩薩の偉大な徳と力も、つまりは理としての妙法（多宝仏塔）と、それを説き実践されたお釈迦さまのおかげであるということです。

これを見ても、ただ「観世音菩薩を拝めば救われる」などど考えるのが大きなまちがいであることは、明白なのであります。(同p. 213~214)

無尽意菩薩の首飾りは、衆宝珠を連ねた瓔珞で百千両金の価値があるものだそうです。これは、美しい真心を象徴しているのだと思われます。

このエピソードは、観世音菩薩のように妙法を学び、実践し、人びとに伝えることの大切さを、私たちに示してくださったものと受け取ることができます。

【参考】七難

人びとがどんな苦難を受けても、観世音菩薩を念ずれば、苦難から逃れさせてくださるとあります。

これは、真実の智慧を持てば、如何なる問題でも解決することができ、人生を正しく生き抜くことができることを言っているのです。このことが、七難として詳しく説かれていますので、かいつまんでご紹介します。右欄上段が経文の内容、下段がその真意です。

火難	大火の中に入っても、観世音菩薩を念じ続ける人は、火がその人を焼くことはできない。
	大火は煩惱。真実の智慧に感應していれば、煩惱に焼かれることはない。
水難	大洪水に押し流されても、観世音菩薩を念じ続ければ、ひとりでに浅いところに流れつく。
	大洪水は際限のない欲望。真実の智慧に感應すれば、欲望に溺れるととはない。
風難	宝物を求める船旅で、暴風に吹かれて悪鬼の国に漂着しても、観世音菩薩を念じ続ける人は、悪鬼にたぶらかされることはない。
	宝物は人生の目的。船旅は人生。暴風は人生途上の苦難。悪鬼の国は、人生を誤ること。真実の智慧を持てば、誤ることなく、人生の目的に向かって生き抜くことができる。
剣難	ほかの人から切られたり打たれたりしても、観世音菩薩を念じ続けていれば、ふり上げた刀でも杖でもバラバラに折れる。
	ほかのひとから憎まれたり、侮辱されたり、疑われたりして、心を切られるようなことが起きても、真実の智慧を持てば、傷つけられることはない。
鬼難	夜叉や羅刹がとり憑ついて悩まそうとしても、観世音菩薩を念じ続けていれば、とり憑くことができず、害を加えることもできない。
	ほかの人が言葉巧みに騙しにきても、真実の智慧を持つ人は、騙されることはない。
獄難	手枷・足枷をはめられ鎖でつながれても、観世音菩薩を念じ続けていれば、手枷・足枷がバラバラに壊れ、自由になる。
	外部からの決まりや命令などに縛られても、真実の智慧を持つ人は、束縛の中でのびのびと振る舞える。 また、真実の智慧を持つ人は、自分の無知・煩惱によって、金や地位や名誉やそのほかのものに縛られることがない。
賊難	盗賊が横行するところを旅しても、真実の智慧を持つ人は、盗賊の難を逃れる。
	旅は人生。盗賊は人生途上に襲ってくる避けようのない苦難・災難。真実の智慧を持てば、どのような苦難・災難に見舞われても、恐れずに正しく立ち向かい、乗り越えることができる。

【参考】観世音菩薩の三十三身

ぶつ びやくし ぶつ しょうもん  
 仏、辟支仏、声聞

ぼんでんのう たいしゃくてん じざいてん だいじざいてん てんだいしょうぐん びしゃもんでんのう  
 梵天王、帝釈天、自在天、大自在天、天大將軍、毘沙門天王、

しょうおう ちょうじゃ こじ さいかん ばらもん びく びくに うぼそく うばい  
 小王、長者、居士、宰官、婆羅門、比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷、

ちょうじゃ ぶによ こじ ぶによ さいかん ぶによ ばらもん ぶによ どうなん どうよ  
 長者の婦女、居士の婦女、宰官の婦女、婆羅門の婦女、童男、童女、

てん りゅう やしゃ けんたっぽ あしゅら かるら きんなら まごらが にん ひにん  
 天、龍、夜叉、乾闥婆、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽、人、非人

しゅうこんごうじん  
 執金剛神

(上記から、人・非人を除いた三十三の姿を、観世音菩薩の三十三身といいます。)